

かたらい

50号
2019 秋

特別企画

「人生100年時代

あなたもライフコースについて考えてみよう」

目次

p2

特別企画

- ①「人生100年時代のライフコースの作り方」
- ② 寄稿「人生100年時代におけるライフコースと『学び』」
柴田 彩千子さん

p6

国際比較

日本語教員 澁川 晶さん

p8

小金井で働く

大堀ファーム 大堀 百合子さん

p10

寄稿「多様な性」

～だれもが自分らしくいられるための社会環境整備に向けて～
NPO法人共生ネット代表 原 ミナ汰さん

特別企画① 人生100年時代のライフコースの作り方

前号に引き続き、今回もライフコースについて考えていきたいと思います。人生100年と言われる時代に入り、学校を卒業した後、社会人として仕事・家庭・地域での生活を充実させていくために、どのようにライフコースを築いていくのか、自分のライフコースを作ってみましょう。インタビューをもとに、6人のライフコースを作りましたので紹介します。

1. ライフコースを考える

人生には、歩んでいくうえで起こる、就職、転職、結婚、出産、介護など様々なライフイベントがあります。また、資格取得のために専門学校へ通ったり、学び直しとして大学や大学院へ入学するといったこともあるでしょう。自分の過去・現在のライフイベントを書き出し、未来について考えることで、ライフコースとなります。

これから自分のライフコースをどのように築いていくか考えたときに、悩んでしまう人は多いのではないだろうか。これまでの人生の中に、参考となることはたくさんあると思いますが、一番大事なのは、自分本来に何がやりたいのかを見つけることです。今まで学んできたことや経験してきたことを振り返り、現在の状況、これからの人生について、やりたいことは何なのか、そのためには何をすべきかを考えてみましょう。

2. ライフコースを見る

自分のライフコースを考えるうえで、他の人のライフコースを見ることは参考にになります。

40代		30代		20代	
後半	前半	後半	前半	後半	前半
より個人に寄り添った親身の指導を心掛けたらいいと思う、塾を自宅に戻す	塾を立ち上げる その後、拡大し駅前に移る	別指導塾で講師を始める	次女を出産	長男、長女を出産	大学卒業・就職 結婚・寿退社 (当時は結婚・出産での退職が一般的だった)

ここでは、6人のライフコースを取り上げますが、この他にもたくさんライフコースがあるでしょう。

(1)「かたらい」第49号でインタビューをした澤田さんのライフコースを見てみましょう。簡単なように見えますが、「勢い」のような熱意が感じられます。それは、息子には何もしてない「母」と映っていたことを知ったことがきっかけでした。

50代	40代	30代		20代	
後半	前半	後半	前半	後半	前半
グループ会社へ出向	行政書士と宅建の資格を取る(頭を使うのが趣味)	(転職を考えたが、ふみ切れなかった)	長男、長女出生	結婚	大学卒業 印刷会社に就職 (営業で100時間以上の残業もあった) 肺結核で3か月入院(仕事の疲れによる)

50代	
後半	前半
英語を勉強するため留学を検討中	これからもずっと教えることは続けていきたい

(2) 大学卒業後に就職し、転職も考えたがそのまま定年まで勤め上げた60代の男性です。ただ、定年後に妻が倒れたことで、介護と家事のしかかかってきました。その中で、地域活動やスポーツを積極的に行い、充実した日々を過ごしているようです。

60代	50代	40代		30代		20代	
前半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半
(予定) 夫婦で図書館通い	(予定) 夫婦で旅行	(予定) 夫と二人暮らしに戻る	(予定) 仕事量が増える	(予定) ビジネス英会話を学ぶ	(予定) 仕事、子育て、私生活のバランスをとる	出産、育児休業 職場復帰(時短勤務中だが転職を考えている)	大学卒業 就職、退社 (就職した会社の仕事に興味を持てず1年で退職した) 結婚 現在の会社に就職

(3) 20代の女性ですが、転職も考えているという事です。今後のライフコースは、第一には仕事と子育てのバランスを取ることです。現在は仕事の他に市民活動もやっているそうで、将来やってみたくともいろいろと考えているようです。

70代	60代	
前半	後半	前半
資格を取り、仕事をしたい	(介護と家事を行うこととなる) 地域活動やスポーツを始める	再雇用 妻が脳梗塞で倒れ、介護が必要となる

(4) 30代の男性は、育児休業を1か月取りました。妻は2人目のお子さんの出産を機に退職しました。今後は妻の再就職や、子どもの成長などによって状況も変わってくるので、先のことはあまり考えていないようです。

30代		20代	
後半	前半	後半	前半
次女出生(妻は退職) 育児休業を1か月取得(妻の育児負担軽減のため)		結婚 転職(ワーク・ライフ・バランスのため) 長女出生(妻は産休・育休)	大学(文系)卒業、メーカーに就職 (就職氷河期のため100社以上エントリー)

(5) 50代の女性は、大学で勉強したドイツへの思いが強かった人です。結婚後はファミリー・サポート・センターの協力会員として活動しています。現在は、これからのようなライフコースを送ろうかと考えているようです。

20代	
後半	前半
結婚(小金井に引越す) 系法律事務所へ就職	大学卒業 アルバイトを2年間 ドイツへ4か月間留学 (ドイツへの思いが強くと就職せず)

長男、次男を出産
(保育園で働こうかと思っただ、自分の子どもを預けて、別の子どもをみることに葛藤があり、働くことはしなかった)
(再就職を考えたが、ふみ切れなかった)

50代		40代		30代	
後半	前半	前半	後半	前半	後半
続けたいが、今、岐路に立っている	介護のため週3日は家を空ける	ファミリー・サポート・センターに登録(有償ボランティアとして子どもを預かる)	私立保育園で3か月アルバイト		

(6) 90代の女性は、仕事ではなく、社会活動を一所懸命行ってきた人で、80代でNPO法人「市民の図書館・公民館こがねい」の理事長を経験しました。現在も活動中です。

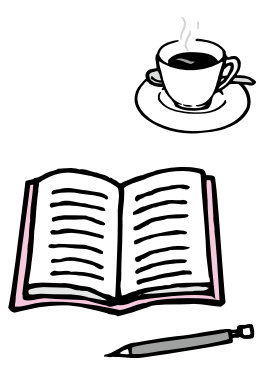
30代		20代		10代	
前半	後半	前半	後半	前半	後半
長男を出産	次女を出産 編み物学校に通い、講師の資格を取る	長女を出産 結婚、ミシンで内職	(20歳の時に終戦) 結婚、ミシンで内職	青年学校の教員養成所へ1年間通う 教員を数か月したのち、挺身隊長として女子寮の寮長となる	

長女が5年生の時、小学校のプログラム学習の教材作りを手伝う(教材作りの手伝いをしたのは、社会に出ていきたくったからだと思っ)
子どもと一緒に授業を受け、モノの考え方を学ぶ(社会科の先生は考えさせる教育を行い、「目からうろこ」で教育に目覚めていく)
PTAで学び、「母親と女教師の会」に参加
(小金井に引越す)
公民館で学び、自主グループを立ちあげる

90代		80代		70代		60代		50代		40代		30代	
前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
「市民の図書館・公民館こがねい」の理事・顧問を務める	「市民の図書館・公民館こがねい」の代表となる	「公民館のあすを考える会」を設立	生涯学習懇談会副委員に就任する	生涯学習懇談会副委員に就任する	社会教育委員に就任する	公民館の企画実行委員を務める	公民館の運営審議会委員となり3期目は委員長に就任する	「老後問題研究会」で訪問リハビリの業務委託を受ける	「福祉を語る婦人の集い」を設立・参画する	公民館で憲法の勉強を始める	「福祉を語る婦人の集い」を設立・参画する	公民館での学習から、「老後問題研究会」の設立に参画	一人暮らしの老人訪問を16年間続ける

3. 自分のライフコースを作ろう

自分のライフコースをつくるには、まず自分の過去を振り返らなければなりません。学校の卒業、就職・転職(正社員、アルバイト、など)、病気(入院、手術など)、出産・育児、資格取得、配偶者の転職・失業・病気、介護など様々なライフイベントがあり、もちろん人それぞれ異なります。そして過去を書いたら、次は未来です。自分の特技や活かせる経験はあるか、何に悩んでいるのか、本当にやりたいことは何かなどを考え書いていきます。いろいろなライフコースを作って良いわけですから、何枚も書いてみましょう。そして、その中で、いろいろ調べることも大事ですし、家族や友人と話し合ってみるのもよいでしょう。ライフコースは一度考えたからと言って、変えてはいけないということはありません。ライフイベントが起こった時にそれぞれ考えます。そして決断したら、後は後悔しないことです。そのようにして、ライフコースを作っていくながら、人生を歩んでいきます。皆さんもぜひ自分のライフコースを作ってみてください。



特別企画②

寄稿

人生100年時代におけるライフコースと「学び」

東京学芸大学総合教育科学系（生涯学習分野）准教授 柴田 彩千子



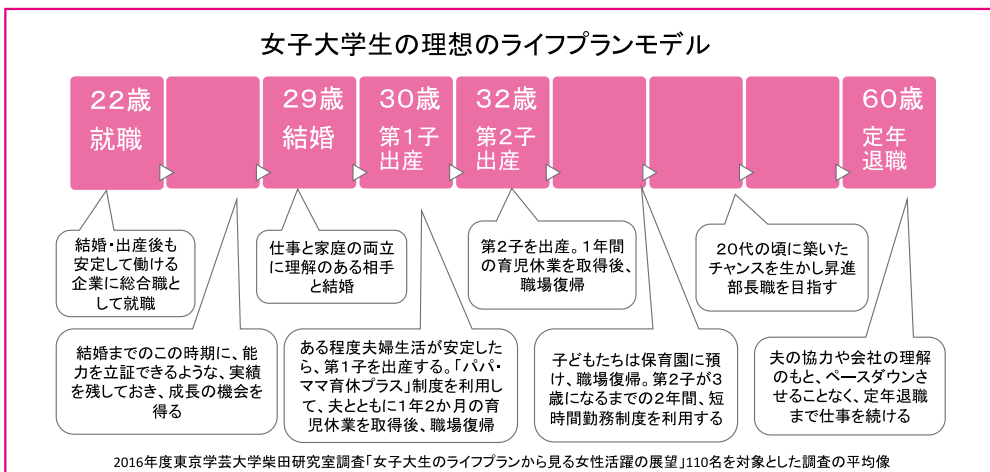
2007年以降に生まれた日本の子ども（現在の小学校高学年の子ども）の半分が、100歳以上生きるだろうという試算のもとに、最近いたるところで「人生100年時代」という言葉を耳にします。人生100年時代の到来とは、単に寿命が延長されるだけでなく、私たちそれぞれのライフコース（一生の間にたどる道筋）に対する価値観の変革が求められる時代と言えるのではないのでしょうか。人生100年時代におけるライフコースについて、私は生涯学習論の立場から、「学び」との関係についてお話ししてみたいと思います。

1. 従来の一般的なライフコース 観る教育期↓現役期（仕事・子育て）↓余生からの転換

ライフコースを考えるうえで、まずは「女子大学生の理想のライフプランモデル」を紹介します（下図を参照）。これは、女子

大学生に対して「学卒後の理想の人生像」をイメージしてもらい、アンケート調査に回答してもらった結果から明らかにした平均像です。この平均像を概観してみますと、結婚や出産後も安定して働き続けることのできる職場で、結婚・出産するまでの間はOJTやOff-JT、自己啓発に勤しみ、自分の能力の伸長と実績を積み上げ、29歳で将来はイクメンあるいはイクボスとなるだろう男性と結婚し、32歳までに子どもを2人出産し、第二子が3歳になるまでは時短勤務をしながら仕事を継続、その後は周囲の理解のもとに家事や育児と両立しながらペースダウンすることなく、定年（60歳）まで仕事を全うし、退職後は余生を謳歌するというものです。

読者の皆さんは、女子大学生の描いた理想のライフコースについて、どのようにお感じでしょうか。さまざまな感想が聞こえてきそうですが、人生の「学び」との関連でこのライフコースを見てみると、次の2点が浮き彫りとなっています。一つには、現在の20代の若者のイメージするライフコースが、学卒迄の教育期↓仕事や子育てが中心となる現役期↓定年退職後の余生の3段階によってつくられていることです。これは、従来の一般的なライフコース像と言えます。しかし、人生100年時代では、60歳以降を余生とすると、人生の半分弱の実に40年間という長期間を余生が占めることとなります。こうなると、もはや余生ではなく、新しい自分自身の創造を追求するような「第二の人生」と捉える方が相応しいのかもしれない。



や学習の時期を、100歳まで生きると仮定すれば、その最初の四分の一の時期に閉じ込めていることがわかります。しかしながら、変化の激しいこの時代を、人生の最初の四分の一に詰め込んだ知識や技術だけで太刀打ちしていくことは、まず難しいでしょう。ですから、この時期には、知識や技術を学ぶことは勿論大切ですが、多様な実体験を通じて、主体的に深く考えるような課題解決に向けた学び方が、このたびの学習指導要領でも求められています。

2. 人生を形成する「学び」とは？

現在の日本では、生涯学習社会の実現に向けて、教育基本法の中で謳われている生涯学習の理念にそくしたさまざまな施策が講じられ、生涯学習の取組みが行われています。また、多くの民間企業が生涯学習に関連するビジネスを展開しています。

生涯学習社会で「学習」あるいは「学び」と呼ばれるものは、人生の教育期で施されるものばかりを指しているわけではありません。つまり、学校教育での学び（フォーマルな学び）や、学校以外の多様な学習施設や職場等で行われる研修やイベント（ノンフォーマルな学び）の他に、自学自習的なものや私たちが無自覚に取り組んでいる「学び」、たとえば、日常生活の中に埋められている家族や友人との対話、サークル活動や市民活動、映画や展示等の鑑賞、等も、「インフォーマルな学び」といって立派な学び

の機会なのです。ただし、日常のさまざまな機会が何でも「インフォーマルな学び」なのかというと、そうではなく、それが自分自身の人生の中で何かしらの意味を成したと思えた時に、「学び」とみなすことができるのです。つまり、そこには、無意図的にとった行動を振り返って、その意味に「気づく」というプロセスが含まれているといえます。

3. 「学び」の資産を自己管理するという視点

読者の皆さんは「人生100年時代を生きるために必要なものは？」と問われたとしたら、何を挙げるでしょうか。

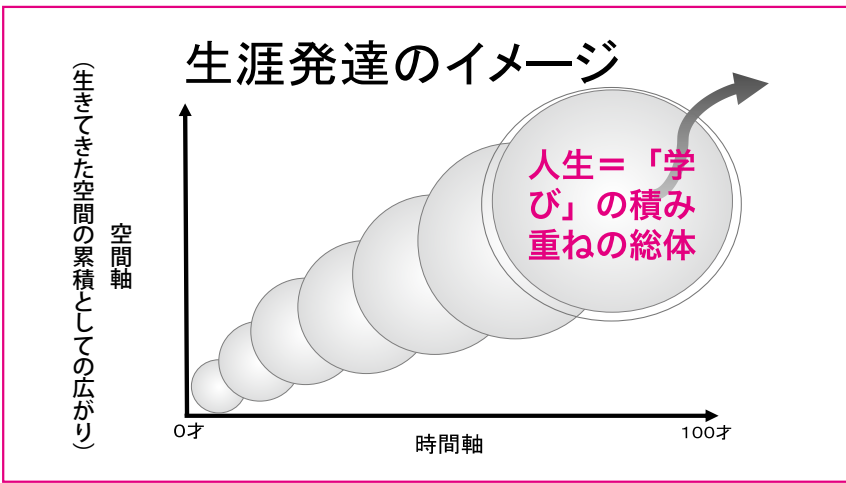
たとえば、人生100年時代における人生論を提唱したリンダ・グラットン氏は、著書『ライフ・シフト』の中で、無形資産を管理していくことが重要だと述べています。この無形資産には、①生産性資産（所得を増やすのに役立つ知識や技術や人脈等）、②活力資産（人生に活力を与える心身の健康や身近な人々との友好な人間関係）、③変身資産（今後経験するだろう人生の変化や変身を遂げるために必要な多様性に富んだ人的ネットワークや、新しい経験に対して開かれた姿勢）があるといえます。

これら3つの無形資産は、全て人生を形成する「学び」によって獲得され得るものです。そして、この無形資産を構成する要素として、「学び」に対して主体的である

うとする態度と、「学び」を支えるゆるやかな人と人との人間関係を重要視している点が挙げられていることに、眼を引きます。

4. 生涯発達と「学び」

繰り返しになりますが、人生100年時代のライフコースにおける「学び」とは、学位や資格、特定の知識や技術等を得るためのものばかりではなく、「インフォーマルな学び」が、人生の時間的にも空間的にも大きな位置を占めるものとなります。左



図：生涯発達のイメージは、私たちが子どもから成人になり、生涯を閉じる日までを時系列に歩んでいく過程で、生きてきた場所が空間的に広がりをもちながら、一生にわたってさまざまな「学び」の経験を積み重ね、それらが個々の中で統合していくことで、その人オリジナルな人生をつくっていくという営みをあらわしたものです。この図を見ると、たとえば、誰もが高齢者になれば、行動範囲が狭まるので空間的に広がりを持たないのではないかと思ってもいいかもしれませんが、生きてきた空間は累積され広がりが続いていくものとみなします。

私たちのライフコースの中で、こうした3つの学び（フォーマルな学び、ノンフォーマルな学び）の経験が、複雑にからみあいながら蓄積され、その学びの経験の総体が、私たちひとりひとりのオリジナルなライフコースを形づくる大きな要素となっていると考えることができます。そして、このライフコースとは生涯発達のプロセスです。人生100年時代をいかに生きるか？といった問題は、私たちの人生の中で経験する「学び」をいかにデザインするか？といったことにつながるといっても過言ではありません。

※1 OJT(on-the-job training) 職場で実務を通して行う教育、訓練 ※2 Off-JT(off-the-job training) 職場での実務を離れて行われる教育、訓練

国際比較

オーストラリア、韓国、アメリカの各国に滞在経験がある、国際基督教大学日本語教育課程教員の澁川晶さんに、豊富な国際経験と育児経験を経て思うことを伺いました。



澁川さんは、国内外で日本語教育の専門家として経験を積み重ねてきた。高校生のころ、比較文化に興味を持ち、また、ALT(外国語指導助手)と交流する中で、「言葉の学びを通じて、文化を理解したい」と、日本語教師を志した。大学では日本語を専攻し、大学院修士課程を修了。その後、1994年から96年までオーストラリアの大学院で、日本語教育を中心に研究を深め、修了後は韓国の大学に日本語教師として1997年まで赴任。帰国後、日本貿易振興会(現・日本貿易振興機構JETRO)で勤務した後、琉球大学留学生センターの教員として、留学生を対象とした日本語教育に携わる。2006年には、夫のアメリカ赴任が決まり、琉球大学の職を辞してアメリカに渡る。2008年に帰国してからは、都内の国立大学で非常勤講師をする傍ら、小金井市の生活日本語教室のボランティア養成講座の講師として地域活動にも参加し、現職に至る。

最初に長期滞在されたのは、オーストラリアだったそうですね。

オーストラリアのメルボルンにあるモナシユ大学大学院に留学しました。既に日本

で大学院を修了していたこともあり、大学の日本語コースの非常勤講師として授業も担当させてもらえましたが、基本的には学生として過ごしました。20年前のことなので、現在は変わっているかもしれませんが、大学全体がのんびりとした雰囲気でした。赤ちゃんを寝かせたバスケットを足元に置いて授業を受けている学生がいるのが普通の光景として受け入れられていて、素敵だなと思いました。

アカデミックな環境での知り合いがほとんどでしたが、ホームパーティーに呼ばれると、夫が料理などを自然に引き受けている姿も多く見かけましたし、夫婦が互いの生活や時間を尊重しているように感じ、理想的な姿に見えました。

オーストラリアの次は、韓国に行かれました。

日本の大学院でお世話になった教授の紹介で、ソウル郊外にある大学の教員に採用され、初めて韓国に行きました。ソウルの中心部から公共交通機関で1時間以上も離れた、一言でいうと「田舎」に新しくできた大学で、いろいろな意味で、多くの発見と勉強と、少しの忍耐が必要な生活でした。

韓国は男社会だと聞いていましたが、意外にも韓国の女性は、自己主張もはっきりしていて、男性に負けるどころか、実は社会を支えているのは女性だと感じたほどでした。

当時は、日本文化を受け入れたり楽しんでたりすることが制限されている頃で、日本や日本人に対しても厳しい意見が多く聞かれる中、ある学生に、「初めて日本人に出



韓国の学生と

会って、今まで教わってきた日本人像とかなり違うと気づいた。普通の人間でフレンドリーで、友達になりたいと思えた。今、正しい日本の姿を知りたいと思っている。」と言われたことが非常に印象的でした。自分が文化交流の糸口になれたのではと嬉しく思う反面、海外で日本語教育に携わる者の責任の重さを痛感したときでもありませんた。

そして、帰国してJETROへ。

日本語を母語としない人を対象としたビジネス日本語能力テストを当時はJETROが実施していました。縁あって、その問題作成業務に従事しないかと声をかけていただき、韓国から帰国してJETROでの仕事に就きました。これまではずっと大学という限られた環境で過ごしてきたため、独立行政法人人といういわば半官半民のような組織の中で今までは違う職業文化に触れることは、多くの気付きを得る機会となり、非常に良い経験になりました。でも、やはり日本語教師として日本語教育の現場(教室)にいたいという思いが募り、ちょうど公募の出た沖縄の琉球大学に応募し、幸運にも採用され赴任しました。

沖縄は、日本の中でも独特な文化を持っています。

生まれ育った関西や、仕事で暮らした東京とは、かなり違う雰囲気ですね。

来るもの拒まずという感じで、懐が広く深く、外国人もアパートが借りやすく、心が温かい人が多い暮らしやすい土地だと思えます。一方で、有名な「ウチナータイム」があるほど、時間の感覚が異なり、例えば、



琉球大学の留学生と

バスに乗るにも、時刻表より遅れて来たのか早く来たのか見当がつかないほど時間が読めず、赴任当初、車を購入するまでは授業時間に間に合うか、ハラハラしながらの通勤でした。

留学生の中には、沖縄に留学してきた当初、「ここは、自分がイメージしていた日本じゃない!」と言い、東京の大学に行きたかったと不満を漏らす人もいましたが、学会等で実際に東京に行くと、沖縄の良さを実感したようで、「沖縄は居心地がいい」、「東京も楽しかったけど、早く沖縄に帰りたいと思った」などと、次第に沖縄に惹かれていく様子が見てとれました。沖縄にはそれだけの温かさがありました。

約8年の沖縄生活の中で、結婚と出産、育児を経験しましたが、地域の密接な人間関係があり、頼れる身内が一人もいない私にとっても、子育てがしやすい土地でした。

育児の真っ最中に、アメリカへ行かれたのですね。

夫のアメリカへの赴任が決まり、非常に

悩みましたが、第2子が生まれたばかりだったこともあり、大学を辞めて一緒に働くことにしました。仕事を辞めた以上は、貴重なフリーの生活を満喫しようと、一切仕事はしないと決めて過ごしました。

アメリカでは、メリーランド州(ワシントンD.C.の郊外)という土地柄もあるかもしれませんが、仕事熱心な人が多く、時間も正確で、東京で生活しているのと変わらない感覚で過ごせるほどでした。ただ、自分の生活を何よりも大事に考えて行動する点は、日本と大きく異なっていると感じました。生活のために仕事があり、仕事のために生活があるのではない、という意識がはつきりしているように感じました。出会った人の多くは夫婦共働きでしたが、勤務時間や場所よりも自分の仕事を責任を持って終わらせることが重要なので、産後は在宅勤務ができたり、家庭内の事情に応じて休みも取りやすかったり、働き方が柔軟です。任された仕事をこなせば、そして、自分たちや家族が快適ならそれでよい、何事にも他人の目は気にしない、という生活スタイルです。



アメリカで近所の友人と

帰国後は、日本語教師を再開しました。

帰国後しばらくは国立大学で非常勤講師をしていました。専任の教員よりも時間的に余裕があり、家庭や子供のことなど、時間的にバランスがとりやすかったです。東京芸芸大学で非常勤講師をしていたご縁で、小金井市の生活日本語教室のボランティア養成講座などに関わる機会をいただきました。その後、国際基督教大学の専任教員となり現在に至っていますが、生活日本語教室からは、今もたまにお声を掛けていただいています。ボランティアの皆さんがとても熱心で、毎週土曜日に日本語教室を開くだけでなく、熱心に勉強会もされていて、イベントなどを開いて地域在住の外国人のサポートをされています。その様子を拝見して、いつも頭が下がる思いをしています。このような方々の存在を、もっと広く知っていただけたらと思います。

多くの異文化体験を経て、日本社会に対して思うことは?

日本語教育という業界の特性もあるかもしれないませんが、今まで仕事上で男女の不平等を感じたことはほとんどありませんし、男性の持つ規範に合わせて働くという意識もありません。そういう意味では、非常に恵まれた職場だと思います。

今も日本の社会は男女平等等とは言えないと思いますが、今の社会に感じる暮らしにくさは、男女差によるものだけではなく、様々な弱者が置き去りにされ、生きにくくなっているからだと思います。例えば、今日本には日本語を母語としない人々が多くいて、その子どもたちが日本で育っている

にもかかわらず、公的なサポートが不十分で、身近にいる心あるボランティアの方が大変な思いをしながら奔走しています。これは一例ですが、今後は、多様性が認められ、尊重される社会でなくてはならないと思います。

そのためにも、まずは、今は薄くなりがちな地域との繋がりを取り戻し、お互い理解し認め合って、風通しのよいコミュニティを作ることが大切だと思います。どのような状況にあっても、地域との繋がりにくい状況にあって、困ったときには助けの手が差し伸べられるはずで、男女差の問題だけでなく、いろいろな意味での弱者を含めて誰もが生きやすい社会であること、それが私たちが目指すべきところなのではないでしょうか。



取材を終えて

女性の社会進出に関わる問題は、女性問題であると同時に、男性の問題でもあり、ひいては社会の構造問題でもあります。澁川さんは「男女共同参画、というフレーズに見える発想が古いのでは?」と、おっしゃいました。こうした広い視野をみんなを持ってれば、と思いました。

(田中)

小金井で働く

大堀ファーム 大堀 百合子さん

2006年小金井市商工会主催の第1回黄金井名物市ビジネスコンテストにおいて、「小金井ルバーブ・プロジェクト」で最優秀賞を受賞した大堀百合子さんに、農業の大変さや、やりがいなどについて伺いました。

農業の仕事はどのように始められたのですか

結婚する前は、福祉関係の仕事をしていました。結婚して農家である夫の実家に来た頃は、農業は義父が中心となっていて、夫は公務員として働いていました。農業はしなくていいと言われていましたが、勤め人の妻だという気持ちでいました。けれど、夫が20年勤めた仕事を辞めて農業を始めた頃には、すでに少しずつ農業を始めたい、ルバーブ等に興味を持ち、野菜の栽培もやりだしたらはまってしまい、農家の仕事が面白くなりました。

主な仕事の様子を教えてください

畑では、年間40〜50種類以上の野菜を栽培しています。季節ごとの主だった野菜に加えて、半白キュウリや亀戸ダイコンなど7種類程の江戸東京野菜も作っています。作物の受粉を助けるミツバチも飼って



て、採れた蜂蜜は、敷地内にある名前の百合子をもじって名付けた工房「リリーファクトリー」で瓶詰め加工しています。蜂蜜は、花の蜜の成分によつて味が変わるの面白いですね。桜の季節の蜂蜜は味も香りも濃厚です。購入された方が「この時期に採

れた蜂蜜なら、あの花の蜜かな」と想像してくれたらいいなと思います。瓶詰めする際には採取した日付を記入しています。

工房では、自家栽培のルバーブやブルーベリー、ゆずなどを使って、ジャムも製造しています。

野菜の中でルバーブに着目したきっかけは何ですか

ルバーブはシベリア原産の野菜で、水分が多く繊維質のフキに似た野菜です。5月頃に花が咲き、6月から8月頃の収穫時期には1メートルを越えるほどに成長します。食べられるのは茎だけで、茎を刻んだものを使ってジャムにします。茎の味は結構酸っぱいのですが、お砂糖を入れてジャムにするとほどよい酸味で、とても美味しいですよ。ルバーブはもともと畑にあったのですが、食べ方がよく分からず、日常的に食べてはいませんでした。ある時、趣味で通っていたお菓子作りの教室で、先生がルバーブの使い方を教えてくださいましたので、きつかけです。

商工会のコンテストに応募した時点では「ルバーブ・プロジェクト」は単なるアイデアだったのですが、せっかく選んでいたのだから具体的な商品へとつなげていくと頑張りました。ジェラートもおいしいなと思いましたが、ルバーブはインパクトの



畑で栽培されているルバーブ



ある味ではないのでなかなか難しかったのですが、ジャムにしたらびつたりでしたね。

おかげさまで、ルバーブジャムは多くの方に喜んで頂ける商品となりました。ルバーブは「小金井ルバーブ」として「東京都地域資源認定野菜」となりましたし、市内の学校給食でルバーブパンが出されています。少しずつ知名度が上がってきたのは、嬉しい限りです。JA女性部の市民料理教

室では、毎年ルバーブジャムをメニューにしています。

農業をされる中で大変なことは何ですか

基本的に、夕方の5時頃には畑の仕事を終えるようにしているのですが、「今日はここまでやろう」と計画した仕事が終わらない場合は暗くなっても作業をしています。夫も息子も、それぞれが仕事を分担して責任を持ってやっているので、自分の仕事を手伝ってはもらえません。

それから、夏場の草取りや収穫はやはり大変です。雨が降ると、畑に雑草が生えて、野菜もすぐに大きくなってしまいます。インゲン是一日放っておくだけで育ちますし、きゅうりは朝と夕方大きさが随分と違います。

また、家事と農業の両立も大変だと思

ます。うちの場合、夫は義母の介護に協力的ですし、食事の後片付けなどは手伝ってもらうことにはしているのですが、食事の準備や洗濯など私の仕事はたくさんあります。

けれど、ボランティアの友人や知人が畑の手伝いに来てくれるおかげで、助けられながら楽しくやっています。

農業の面白さややりがいは何ですか

種蒔きをする時が好きなんです。種はコマ粒のように小さく、どれも同じようなものなのに、大きくなるとそれぞれが違う種類や味になる、それが面白いですね。収穫が大変なのも考えず、今度はこんなやあんなの作ってみたい、と次々考えてしまいます。農家の栽培方法が時代とともに変わっていくのも面白さの一つで、農家の可



能性を感じる点でもあります。

作った野菜は農協に出すだけではなく、庭先販売もしています。お客さんはピーターの方も結構います。対面販売だと作ったものに対する反応がよく分かるので、やりがいを感じます。きゅうりを買っていかれたお客さんがそれを佃煮にして持ってきてくださったり、ルバーブの場合はケーキにして持ってきてくださることもあり、ありがたいです。今度はこんな野菜を作って欲しい、という声を頂くこともあります。

毎月第一日曜日には直売所で「こがね市」という朝市を開催しています。これは雑貨や食べ物など、小金井で色々なものを作っている人たちと一緒に、面白がってやっているものです。リピーターのお客さんも増え定着してきたな、と手応えを感じています。

今後の夢を教えてください

ルバーブジャムを作り始めて12年が経

ち、ありがたいことに、「ルバーブジャムをうちでも扱いたい」と言ってくださるお店も増えてきました。私としても、ジャムなどの加工を充実させ、もう少し広げていきたいらと思っています。基本的には、新しい事に手を出すよりもこれまでやってきたことの規模を広げていきたいです。農家の仕事には、あれもこれもやろうと思えばやれる、という面があります。けれど、口に入るものを作っていますから、これまで続けてきたように一つ一つ丁寧に目の行き届くようにやっていくのが大事だと思います。

もし後継者が見つければ、新しいことに挑戦するのもいいですね。次女がパンを焼くことを趣味としているので、野菜を使ったパンの開発などを一緒にやれないか、スカウトしているところですが、経済的裏付けが難しいですね。



取材を終えて

大堀さんの言葉の端々からは、やりがいを持ってお仕事を楽しまれている様子が伝わってきました。

大堀さんは、お仕事を通じてお仲間やお客さん達と広くつながりを作られています。そのオープンな姿勢こそが、お仕事を楽しむ秘訣なのではと感じました。(須賀)

ルバーブジャムの作り方

材料

ルバーブ 200g
砂糖 60g
洋酒(ラム酒など) 少々



作り方

- 1 ルバーブのキズ等を取り除き、水洗いし1cm くらいの大きさに切る。
- 2 1を鍋に入れ、砂糖をまぶし、よく馴染ませてから弱火にかける。
- 3 かき混ぜながら10分くらい焦がさないように煮込む。
- 4 最後の仕上げとして、お好みに応じて洋酒を少量加える。

多様な性

～だれもが自分らしくいられるための社会環境整備に向けて～

原 ミナ汰 (はら・みなた)

NPO法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク代表
理事／LGBT法連合会共同代表

1980年代後半からLGBTサークルでサポート活動。2008年に立ち上げた「共生ネット」で、LGBTQの人々やその家族への相談・支援を本格化。「よりそいホットライン」セクシュアル・マイノリティ回線統括コーディネーターを務め、国・自治体職員、教員、援助職者向けに、全国500か所以上で「性の多様性」研修を実施。渋谷区、世田谷区、文京区を始め多くの自治体のLGBTQ相談・居場所・啓発事業に協力している。



はじめに)

「性の多様性」とは、性的指向と性自認、LGBT/SOGIの基礎知識

近年テレビや新聞でよく取り上げられる「LGBT」。LはLesbian(レズビアン)女性を好きになる女性)、GはGay(ゲイ)男性を好きになる男性)、BはBisexual(バイセクシュアル)男女両方好きになる人)、TはTransgender(トランスジェンダー)性別の境界を越えて生きる人)の頭文字を連ねた言葉で、いまや多様な性を表す代名詞です。「言葉は聞いたことがあるけれど、知り合いいはないよ」と断言する人が多いのですが、実際には伝えていないだけで、いないことにされてしまっているのが、「身近に必ずいる」と思っているでしょう。

性の多様性を語るとき、「自分は男だ」とか「自分は女ではない」などという性別に関する確信を「性自認」、「どんな性別の人を好きになるか、ならないか」というのを「性的指向」と呼びます。ついこないだまでは人は誰しも「生まれてから死ぬまでひとつの性別で生きる」し「思春期になれば必ずと異性に惹かれる」とされてきました。実際、自分が男か女かに迷いがなく、思春期になれば異性に関心を持ち始める人が大多数です。でもそれに当てはまらない人が、世界に5%〜10%程度いることも確かです。近年日本でも7.6%〜8%、つまり12〜13人に1人はそうした社会通念に当てはまらないという民間のインターネット

調査があります。

(1) LGBTとは、性的指向、性自認におけるマイノリティの総称。「性の多様性」を表現する言葉であり、この四つのカテゴリーの人びと以外を指すこともある

LGBTのうち、LGBは「どの性別を好きになるか、ならないか」性的指向にかかわるマイノリティを指しますが、その他、「性的欲求がない」アセクシュアル(無性愛)の人、「性的関係に関心がない」ノンセクシュアル(非性愛)の人、「恋愛をしない」アロマンティック(非恋愛)の人も、性的指向に関わるマイノリティとされています。

一方、LGBTのT(トランスジェンダー)は「自認する性別は何か」性自認にかかわるマイノリティです。なかでも最もよく知られているのは「性同一性障害」の診断を得て、男性から女性に、あるいは女性から男性に性別移行する人びとです。性的指向と同様、それ以外にも「どちらの性別の自認もある」バイジェンダー、「どちらの性別にもあてはまらない」アジェンダー、「性別が流動的」ジェンダーフルイド、「性別二元論に同調しない」ジェンダークイアなどがいて、日本では、それらを総称して「Xジェンダー」と呼んでいます。また、若者を中心に、自らの性的アイデンティティを探る傾向もあって、LGBTに限定できない、迷っている、思案中、という人たちの間では、LGBTQ(ク

エスチヨニング、クイア)というとりえ方も重要です。

(2) LGBTは、必ずしも「相互排他的な分類」ではない

LGBは性的指向の類型であり、Tは性自認の類型であることから、「LGBであれば、Tではない」とか「TであればLGBではない」など、相互排他的なカテゴリーだと思われがちです。たしかに、LGBの多くがシジェンダー(性別違和のない人)で、T(トランスジェンダー)ではないのですが、性的指向の揺れによってL⇓B、G⇓Bを行き来することや、性自認の揺れによってL⇓T、G⇓Tを行き来することもあります。

また、トランスジェンダーの人がみな異性愛ではなく、女性に惹かれるトランス女性や、男性に惹かれるトランス男性は珍しくありません。Xジェンダーのように、二元的な性別感覚をもたない人に至っては、結ぶ関係性が同性愛なのか異性愛なのか、本人でさえ判断が難しい場合もあります。では、なぜLGBTを合わせて取り上げるのか、その理由は、切り分けが難しい相互関連性と、トランスジェンダーがマイノリティの中でもさらに少数派であるという事情にあります。トランスジェンダーは、シジェンダーのLGBに比べると数こそ少ないのですが、元来男性のみ、女性のみで暮らし、男女分かれて過ごしがちな同性愛男女をつなぐ貴重な存在でもあるのです。

③性の課題は人権課題〜SOGIの成り立ち

いうまでもなく、性の課題はLGBTのみならず、すべての人に関わる人権課題です。性の話は、それ自体しばしばタブー視され、公的な場でともに取り上げられないため、過酷な人権侵害が行われても見過ごされがちです。そこで、マイノリティかマジョリティかの立場を超えて、すべての人を包含する概念として、性的指向+性自認の課題を掛け合わせたSOGI (Sexual Orientation and Gender Identity // 性的指向・性自認、読みは「ソジ」とする) という表現が提唱され、普及してきました。

LGBTが、「どんな人々の人権を保障すべきか」を明示するのに対し、SOGIは、「どんな事柄に関して人権を保障すべきか」を明示できる利点があります。LGBTであることを表明するには、カミングアウトが必要ですが、社会的偏見がはびこっていると、カミングアウトすることで自分の居場所や社会的生命を失うリスクが高まります。かつて、ナチスがゲイ男性を絶滅収容所に送った歴史がありますし、この日本でも、ゲイであると言ひふらされて自死する事例もあるのです。それに比べ、SOGIという概念は、「同性愛であれ、異性愛であれ、無性愛であれ、すべての人の性的指向、そしてトランスジェンダーであれ、シスジェンダーであれ、Xジェンダーであれ、すべての人の性自認を尊重する」のが主旨ですから、ことさらLGBTを特

定せずに平等運用できる範囲がぐっと広がります。また、「LGBTを保護する」と規定してしまうと、その家族などの関係性、もしくは憶測のみによって被害を受ける人は保護の対象外となりますが、「SOGIは保護の対象外となりませんが、SOGIにかかわらずなく平等に」と規定すれば、関係や憶測による差別に遭う人が取り残されることはありません。以上の理由で、SOGIは、条例や法律の制定や施策の運用において重要なキーワードで、SOGIに関わる差別の解消や、「性的指向、性自認にかかわるハラスメント」SOGIハラ」の防止策が国内でも順次進められています。去る2019年5月29日には、女性活躍法の一環として、職場におけるSOGIハラをパワハラの一形態と規定するパワハラ関連法が成立し、現在、厚生労働省が職場でのSOGIハラ防止指針を策定中です。

④自治体が支える、戸籍上同性同士のパートナー関係

LGBTの困りごとをみると、戸籍上同性のパートナーとの関係に法的保護がないことで被る不利益が多いことがわかります。パートナー関係は、LGBTみんなにかかわることですし、相手の法的性別がたまたま自分と同性か異性かで、社会生活上の困難が大違いです。

近年、各自治体でも多様な性や暮らしを支える取り組みが進んでいます。中でも最も注目されているのはパートナーシップ認証制度でしょう。鳥のように「つがいや暮らし」属性をもつ生き物は多く、人間の

婚姻制度もその発展形ですが、法律婚をすることで受ける恩典は実に200以上もあると言われます。男女の結びつきの場合、住民票に（未届け）と記載すれば事実婚認定され、法律婚に準ずる扱いを受けられる場合がありますが、戸籍上同性のカップルはまったく想定外で、事実婚さえ認めてもられません。「結婚できないのだから、事実婚でもない、単なる同居人」というのが現在の国の考え方です。それでも、2015年に渋谷区の条例制定と世田谷区の要綱によるパートナー宣誓が発足して以来、全国20を超える自治体で、戸籍上同性であるカップルを、異性カップルとできるかぎり同等に扱うことを定めた制度等が導入されています。

こうしたパートナーシップ認証制度は法的効力がないとされますが、地域でのアナウンス効果は高く、若い男性同士のカップルから「自分たちを拒絶していたが、制度が導入されて以来、両親に心境の変化があった」と嬉しい報告もありました。「結婚」というと若い人たちの関心事という印象ですが、家族関係を安定させたいと願う子育て中の同性カップルにも役に立つ制度です。また、長年のパートナーに対して公的承認を得ることで、病気や老後に備えたいという切実な動機がある40代以上の中高年LGBTの間でも関心が高いようです。

このうねりは札幌から沖縄まで全国に広がり、第1号の渋谷区から、那覇市、札幌市、福岡市、大阪市、千葉市、横須賀市など、対象者や同居要件を含め制度は徐々に使

やすく進化しています。つい先ごろは茨城県知事が、反対を押し都道府県として初のパートナーシップ制度導入を決めました。東京都でも、2018年10月5日、2020オリンピック・パラリンピック競技会に向けた環境整備の一環として、性的指向や性自認を理由とする差別解消を目指す都条例が成立し、電話相談窓口が開設されています。「社会の罍型にうまくはまらな」とダメだ」というこれまでの生き方が、確実に「誰しも人と違う個性や特性がある。それを最大限に発揮しよう」という方向に変化しています。住民の中にもLGBTやその家族が暮らししている、との認識が広がるにつれ、パートナーシップ制度の導入を検討する自治体はますます増えていくでしょう。当事者や家族はもとより「性の多様性ってなんのこと？」と疑問に思う皆さんもぜひ一度、多様な性・多様な暮らしについて考えてみませんか。

本稿は、月刊自治研 2018年6月号「虹色社会」をめざして—LGBT/SOGI入門」に寄せた拙稿をもとに、加筆修正したものです。

参考文献：「市民が描く社会像 2019—自治体政策リスト30」 11. パートナー条例・制度（同性パートナーシップの法的保障を求める全国ネットワーク共同代表 池田 宏、運営委員 中村 貴寿、運営委員 鹿島 真人）

男女共同参画関連の会議に参加してみませんか

～参加費及び交通費を補助します～

市では、男女共同参画社会の形成の促進に係る会議等に参加する市民に、参加費用の一部を補助する事業を実施しています。お気軽にご利用ください。市ホームページにも掲載しています。

1 補助対象となる会議等

東京都及び東京都に隣接する地域で開催される男女平等社会の早期実現を目指すための会議(宗教及び政治活動並びに営利等を目的とするものを除く。)であって、講演、シンポジウム、分科会等が行われ参加者相互の交流が行われるもの。

2 応募資格 次の条件をいずれも満たす方。

- (1) 当該会議等を開催する日現在で、当市に2年以上居住し、18歳以上の方
- (2) 男女平等及び男女共同参画に関心を持ち、地域活動及び市行事に積極的に参加できる方

3 応募者の決定

参加希望者が定員(予算の範囲)を超えた場合は、抽選により決定します。

4 参加費補助の内容

開催地までの旅費及び会議に参加するための諸経費を合算した額の2分の1

5 応募方法

申込書をご記入のうえ、男女共同参画室へご提出ください。

申込書は市役所本庁舎又は第二庁舎入口のチラシラックに配置している他、市ホームページから申込書がダウンロードできます。

小金井市 国内研修事業参加補助金 検索

「かたらい」について読者の方から意見・感想等を募集しています。

氏名(ふりがな)、ペンネーム(記載がない場合はイニシャルとします)連絡先を明記し、直接、郵送またはファクスで企画政策課男女共同参画室へご提出ください。

※一部抜粋して掲載させていただくことがあります。

〈提出先〉〒184-8504 住所不要 企画政策課男女共同参画室 FAX：042-387-1224

編集後記

「ライフコース」についてお分かりになりましたか?新しい試みですが、皆さんの考え方の一助になればと思います。就職活動に行く前に、一度考えてみてはいかがでしょうか?」
 (佐藤百合子)

仕事に復職してから思うように編集会議に参加できず、あらためて育児と仕事をどう両立していくのが良いのか考える日々です。今年度中に個人的な働き方改革を進めて行こうと思います。
 (佐々木成美)

①国の借金 ②原発 ③温暖化した地球 ④核兵器 子供の時代に遺したくない順番は? 最下位は①だと思っけど、現実には①の対策が最優先されている気がします。
 (田中映子)

特別企画のため、お二人の市民の方にこれまでの人生についてお話を伺いました。一人に一つしかない人生のあり方にずしんと重みを感じた、貴重な機会でした。
 (須賀佳苗)

今号は、前号に引き続きライフコースを特別企画のテーマとし、6人の方に自身のライフコースを伺いました。取材にご協力いただきました皆様、御礼申し上げます。
 (男女共同参画室)

「かたらい」は、公募による市民編集委員が、企画・取材・執筆を行っています。